

古代ギリシア語碑文研究のメディア

前野弘志

はじめに

普段、私たちが目にしていく碑文史料は、何を材料として編集されているのだろうか。もちろん石や金属に刻まれた文字がオリジナル史料である¹⁾。このようなオリジナル史料が碑文研究の原点であることは間違いない。しかしオリジナル史料が常に最良の材料であるとは必ずしもいえない。実際に碑文学者は、石や金属に刻まれた文字のみならず、それらの写真、旅行者（碑文学の黎明期において碑文学者は同時に旅行者でもあった）によるスケッチ、拓本などを組み合わせて史料を編集しているのである。ここでは、石（金属を含む）・写真とスケッチ・拓本・新しい媒体としてのインターネットを、情報（古代の人々が考えたことや行ったこと）を発信者（古代の人々）から受信者（私たち）へと橋渡しする「媒介物」あるいは「情報の入れ物」という意味において「メディア」と呼ぶこととする。そしてここでは、これら一つ一つのメディアの長所と短所について論じるつもりであるが、その理由は、この考察が、古代の人々が碑文をどのように読んだ（あるいは見た）のかを知る手がかりとなり、そのことによって、従来の碑文学研究の問題点の一つが垣間見られると思うからである。

I. 石

石に刻まれたオリジナルの史料を見るためには、ヨーロッパやアメリカのあちこちにある博物館に足を運ばなければならない。大英博物館のような大きな博物館はいうまでもないが、ギリシアの地方にある小さな博物館でもその土地

で発掘された碑文を見ることができる。また遺跡を歩けば建物などに刻まれた碑文を見つけることができるだろう。しかしたいの博物館において、碑文は花形展示物ではない。碑文はサンプル程度として展示されているだけで、ほとんどのものは地下の収蔵庫に収められており、特別な許可がない限り見ることができない。その一方で、碑文をメインに展示した博物館もある。アテネの国立考古学博物館の一角にある碑文博物館 Epigraphical Museum である²⁾。そこではペルシア戦争中にテミストクレスが動議したアテナイ租界の決議やデロス同盟の貢納表などを見ることができる。しかしそこを訪れる人はまばらで、たまたま迷い込んできた観光客もチラッチラッと石を眺めるだけで足早に去っていく。多くの人々にとって、金製品や彫刻や壺絵ほど美しくもなく、何が書いてあるのかも判らない碑文は、ロゼッタストーンでもない限り、あまり興味を引くものではないからであろう。しかしそのロゼッタストーンにしても、ナポレオンによるエジプト遠征の際（1799年）に発見され、後にシャンポリオンによって象形文字の解読に役立てられたという大英博物館の目玉展示物を一目見ようと思って長蛇の列に並ぶ人は多いだろうが、前196年にプトレマイオス5世の恩恵に報いて神官団が出した返礼の布告を読もうと思って並ぶ人はどれくらいいるだろうか。

碑文そのものは古代の人々が同時代あるいは後世の人々に宛てて情報を発信するために建立したメディアである。従ってオリジナル史料を見るにまさることはない。石の大きさや質感・重量感、文字の形や擦れ具合、石の保存状態など、史料集の記述を読んでもなかなかピンとこない情報を実感できるからである。また古代の人々も読んだであろう石碑の前に立っていると、石を媒体として彼らと対話ができるような気にもなる。しかしオリジナル史料を見ることの利点はそのような感性的なものばかりではない。例えば、それまで別々に登録されていた二つの碑文が、石の形やヒビ割れや節理の様相が決め手となって、元は一つの碑文であったことが明らかとなり、接合されることもある³⁾。また近年では、石の表面の摩滅して読めなくなった文字をレーザー光線を利用して読む方法が開発された。石工は石に当てた鑿をハンマーでたたいて文字を刻んだのであるが、その際の打撃は石の内部の組織をも押し潰しているため、その押し潰された組織の痕跡を検出することによって、読めなくなった文字が読め

るようになるそうである⁴⁾。この種の研究は、オリジナル史料を観察することなしには不可能である。

その反面、オリジナル史料の不便なところもある。まず碑文の刻まれた石自体が重く高張る点である。大きさは千差万別、片手で持てるほどの断片もあれば、高さが3mを超えるものもある。形状もさまざまで、石板もあれば円柱もある。それ故に本を書棚に収納するようなわけには行かない。大きく重いものは床に置き、小さなものは棚に載せるのが普通である。私はオックスフォード大学のアシュモレアン博物館の地下収蔵庫に入ったことがあるが、そこには碑文史料が足の踏み場もないほどに置かれていた。そのために、奥の方にある碑文を読もうとしても、手前に置かれた石がじゃまになって、屈んでも背伸びしても読むことができない。無理に読もうとすると身がよじれて大変いらいらさせられた。それもそのはずで、このような収蔵の仕方は、そもそもできる限り多くの碑文を詰め込むためのものであって、その場で読むためのものではないからである。本格的に読むためには普通、目当ての石をジャッキで持ち上げ、備え付けの台車に載せて、広い場所に移動させるのである。もし仮にはじめからその場で読むことを前提にして碑文を収納しようと思えば、膨大な広さの収蔵庫が必要になるだろう。またそれが実現したとしても、今度は碑文学者がその広い収蔵庫の中を目当ての碑文を求めて歩き回らなければならないだろう。オリジナル史料は、複数の史料を参照することにおいて明らかに不便である。

II. 写真とスケッチ

参照の煩わしさを解消してくれるメディアの一つが写真である。写真の利点は高張らないことにある。何百枚の写真でも検索できるようにファイルしておけば、いちいち博物館を訪れたり、身をよじったりしなくて済むだろう。時間と労力の大きな節約である。碑文学の研究所には拓本とともに多くの写真やスケッチも研究史料として保管されている（石は博物館の領分である）。スケッチは碑文学の黎明期に活躍した碑文学者たちが残したもので、実物大の大きなものもあるが、ポケットに入るくらいの手帳に描かれたものが多い。中には今では失われてしまった碑文を書きとめたものもあり、その学問的な重要性はいう

までもないが、初期の碑文学者の探究心や苦労を知る史料としても重要である。しかしスケッチというメディアは写実性という点ではやはり写真にはかなわない。写真の多くは未刊のもので、頼めば閲覧はできるが、自分の論文に掲載しようと思えば許可が必要となる。刊行された写真は、碑文史料を扱った論文や考古学的な調査報告書の末尾にカタログの形で掲載されることが多い。また碑文学の入門書⁵⁾、アルファベットの地方的特徴の研究⁶⁾、アルファベットの時代的変遷の研究⁷⁾、書式の研究⁸⁾、刻み手の研究⁹⁾、レリーフ付き碑文の研究¹⁰⁾、などにも多くの写真が掲載されている。これらの写真を見ることによって碑文の具体的なイメージを得ることができるだろう。しかし、写真の欠点は、それが実物大ではなくまた二次元の世界であるということである。

III. 拓 本

拓本（英 *squeezes*, 独 *Abklatsche*, 仏 *estampages*）は実物大で三次元の世界である。拓本こそがギリシア語碑文研究の主要なメディアである。これは日本におけるような墨を使った方法ではなく、湿らせた紙の繊維を刻まれた文字の溝に叩き込んで乾かした後に出来た型を剥ぎ取る方法である。拓本とりには多少の熟練が要求されるが、方法はいたって簡単である。まず容易するものは、バケツ、水、スプレー、スポンジ、紙、ハサミ、そしてブラシである。紙を除いてはどれも日用品である。紙は薬局などで使う大きな濾紙を使う。ブラシは柄が付いていて適度な重さがあり束子のように目の詰まった固めのものがよい。まずバケツの水をスプレーに入れて石の表面に満遍なく噴きかける。次にスポンジで擦って石の表面に付着した汚れをとる。またスプレーして汚れた水を洗い流す。次にハサミで適当な大きさに切った濾紙を石の表面に貼り付ける。一枚の紙に取まらないような大きな碑文をとるときには、複数の紙を継ぎ合わせる。糊は必要なく、つなぎ目を5cmくらい重ねるだけでよい。それからまた十分に水を噴きかける。次に柔らかくなった紙の繊維をブラシで文字の溝に叩き込んでいく。パンパンと音がするくらい強く叩く必要があるが、強すぎると紙が破れるので要注意。紙と石の間に気泡が残らないように石の中央から外に向かって叩くのがコツである。叩き方によって拓本の出来が決まる。文字をとり

そこなっていないか確認したら、もう一度、水をスプレーして出来上がり。後は乾くのを待つだけである。私が6月にアシュモレアン博物館で行った時には、閉館時間の都合上、一晚待った。翌日、収蔵庫に降りてみると、十分に乾いた紙は「出来ましたよ」と言わんばかりに自分から床に剝がれ落ちていた。夏のギリシアなら20分くらいで乾くそうである。かつての碑文学者たちはそのようにして拓本をとり、出来たものをクルクルッと丸めて筒に入れて旅行したのである。写真がなかった時代、あるいはあっても高価で、また原版がガラスで出来ているために割れやすく重かった時代、拓本は軽くて安上がりなメディアであった。

こうして出来た拓本の表は凹面、裏は凸面となる。そして碑文学者は拓本を裏返して凸面の方を読む。なぜならば実際に凹面は殆ど文字が見えないのに対して、凸面は光を当てると陰影が付き、文字がくっきりと浮かび上がって読みやすくなるからである。但しその場合、読む文字は鏡文字となる。はじめは頭が変になりそうな気がするが、意外とすぐに慣れるものである。拓本を実際に読む際には、小さなものならそれを手の上でクルクル回しながら、大きなものならテーブルに載せて自分がその周りをグルグル回りながら読む。そうすることによって光の角度が変わり、読めなかった文字が突然に驚くほどはっきりと読めるようになることがある。また拓本には、文字のみならず石の傷や石工の鑿使いまでも忠実に写し取られる。例えば、Xのような文字の線が交差した個所の凸面を見ると、上にあるのが先に刻まれ線であり、下にあるのが後から刻まれた線である。

最も豊富な拓本コレクションを誇る研究所は、*Inscriptiones Graecae* を編集しているベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー-Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften である。その他、プリンストン大学の高度研究研究所 Institute for Advanced Study やケンブリッジ大学の古典考古学博物館 Museum of Classical Archaeology などが有名である¹¹⁾。拓本の寿命は、とり方や扱い方によってもことなるが、100年は超える。1950年代に紙の代わりにラテックスの拓本も試されたそうであるが¹²⁾、未だに紙の拓本に取って代わるものはない。誰がいつ発明したのかは不明であるらしいが、拓本は恐るべきローテクである。

IV. インターネット

拓本がローテクなら、インターネットはハイテクである。今ではそれぞれの研究所がホームページを開設してさまざまな情報を提供してくれているが、なかでもオンラインで利用できるイメージバンクは、日本にいる我々にとって特に便利である。イメージバンクとは、拓本を直接スキャナーで取り込んで、デジタル化した映像を蓄積し、誰にでも閲覧可能にしたものである。管見の限りでは、今のところオックスフォード大学の古代文書研究所 Centre for the Study of Ancient Documents¹³⁾ とオハイオ州立大学の碑文学および古文学研究所 Center for Epigraphical and Palaeographical Studies のものがある¹⁴⁾。そもそも碑文のイメージバンクは、ミシガン大学とデューク大学による APIS (Advanced Papyrological Information System) のパピルス文書のイメージバンクからヒントを得て構築され始めたそうである。両研究所のプロジェクトも目下進行中であり、毎年漸次サンプルイメージの数を増加している。このメディアの欠点は、当然のことながら、写真と同じ二次元の世界であることである。

おわりに

以上、簡単に古代ギリシア語碑文研究に使われるメディアを紹介してきたが、いずれのメディアにも一長一短あり、それらを組み合わせて利用することが肝要であろう。ところで、このようなメディアの考察は、従来の碑文研究の姿勢に関して一つの問題点を指摘するように思われる。すなわち、従来の碑文研究は、拓本とりに象徴されるように、テキストを石から引き剥がして読んできたという点である。確かに、石に刻まれたテキストが特に参照に不便であることは、収蔵庫での作業を思い起こせば理解できるだろう。だからこそテキストを石から拓本（紙）に置き換える必要があったのである。しかしこの行為は、古代の人々がやったことと反対である。そもそも古代ギリシアにおいては、テキストはまずパピルス紙などに書かれて文書館で保管・閲覧されていたのであり、後にそのテキストの一部が掲示の目的で石に刻まれて建立されたのであった¹⁵⁾。

このような事情を考慮すれば、古代の人々は揭示のためにテキストを紙メディアから石メディアに置き換えたのに対して、現代の碑文学者は研究の便宜のためにテキストを石メディアから紙メディアに戻していることになる。この意味において、現代の拓本ライブラリーは古代の文書館の再現ともいえるだろう。しかし、たとえ同じテキストではあっても、紙メディアに書かれた時の意味と碑文メディアに刻まれた時の意味は、果たして同じであろうか。

碑文メディアは二種類の情報を同時に発信していたと思われる。一つは刻まれたテキストの内容であり、もう一つは碑文が存在することの意味（表象）である。このことはロゼッタストーンの例がよく示しているであろう。従来の碑文学は、碑文を文字史料として認識し、テキストに書かれた情報を読むことに専念してきたため、碑文の存在そのものが発する意味についてはあまり注意を払わなかったのではあるまいか。後者の意味を読み取るためには、碑文を文字史料としてのみではなく、いわば非文字史料としても認識し、テキストを石から引き剥がすのではなく、逆にテキストを石に貼り戻してやり、さらにその石を古代の人々が読んだ（あるいは見た）であろう場に戻してやって、それら全体から発せられる情報を分析することが必要であろう。

註

- 1) ギリシア語碑文学の領域は広い。石や金属に刻まれた民会および評議会の決議（法令、会計文書、目録、顕彰碑文など）、王の勅令、書簡、墓碑、奉納碑文、境界石などの他に、陶器に書かれた文字やサイン（美術史）、コインの碑銘（貨幣学）、陶片に書かれた文字（パピルス学）など、他の学問領域と重複する領域も含まれる。しかしここでいう碑文とは、専ら石や金属、特に石に刻まれた民会および評議会の決議のことを指している。
- 2) 通常 EM と省略される。
- 3) A. G. Woodhead, *The Study of Greek Inscriptions*, 2nd. ed. (Norman, 1992) pp.68-71.
- 4) M. Chambers/ R. Gallucci/ P. Spanos, "Athnes' Alliance with Egesta in the Year of Antiphon," *ZPE* 83 (1990) pp.38-63. この研究については、師尾晶子「デロス同盟と碑文研究—碑文の刻文年代をめぐるマッティンリ説と近年の学会動向—」『史学雑誌』105-11(1996) pp.59-86、特に pp.64-65 に紹介がある。
- 5) M. Guarducci, *Epigrafia Greca*, vol.I, (Roma, 1967); vol.II, (Roma, 1969); vol.III, (Roma, 1975); vol.IV, (Roma, 1978).

- 6) H. Roehl, *Imagines inscriptionum graecarum antiquissimarum*, (Berlin, 3rd. ed. 1907); O. Kern, *Inscriptiones graecae: Tabulae in usum scholarum* 7, (Berlin, 1913); L. H. Jeffery, *The Local Scripts of Archaic Greece*, (Oxford, 1961), rev. ed. by A. W. Johnston (Oxford, 1990).
- 7) P. Graindor, *Album d'inscriptions attiques d'époque impériale*, (Paris, 1924); J. Kirchner, *Imagines inscriptionum atticarum*, (Berlin, 1935), 2nd. ed. by G. Klaffenbach, (Berlin, 1948); H. R. Immerwahr, *Attic Script: A Survey*, (Oxford, 1990).
- 8) R. P. Austin, *The Stoichedon Style in Greek Inscriptions*, (Oxford, 1938), repr. ed. (New York, 1973).
- 9) S. V. Tracy, *Attic Letter-Cutters of 229 to 86 B.C.*, (California, 1990); S. V. Tracy, *Athenian Democracy in Transition: Attic Letter-Cutters of 340 to 290 B.C.*, (Berkeley/ Los Angeles/ London, 1995).
- 10) C. Lawton, *Attic Document Reliefs*, (Oxford, 1995).
- 11) Woodhead (1992) p.82.
- 12) Woodhead (1992) p.80.
- 13) <http://www.csad.ox.ac.uk/CSAD/Images.html>
- 14) <http://omega.cohums.ohio-state.edu/epigraphy/inscriptions/>
- 15) J. P. Sickinger, *Public Records and Archives in Classical Athens*, (Chapel Hill/ London, 1999).

(広島大学文学部)